

学習者を取り巻く状況変化と国語科教育

多様な背景を持つ学習者に対応する試み

千里国際学園での実践——制度と内容から——

福 島 浩 介

はじめに

帰国生徒・外国人生徒・一般生徒が共に学び、キャンパス内に国際学校を併設する、千里国際学園にとうとう十年間も勤務しました。

この、特異な学校での、様々な背景を持った生徒たちに対する教育実践を通して、「多様な背景を持つ学習者」に対応するためヒントを見つけていただければ幸いです。

千里国際学園

(一) 学校の特色

この学園は、平成三（一九九一）年帰国子女の受け入れを主たる目的として、外国人子女や一般国内生徒も共に学ぶ新国際学校の理念をもって創立された。この学園には、千里国際学園中等部・高等部（SIS）と大阪インターナショナルスクール（OIS）の二つの学校があつて、同じキャンパス・校舎・施設を共同で使

用している。前者は、近畿圏に海外から帰国する生徒を主体にして、国内育ちでも、将来の国際人をめざす一般生徒と主に日本語で教育を受けたい外国籍生徒がともに学ぶ学校である。後者は、大阪とその周辺地区の外国人コミュニティの四歳の幼児から高校生までのための英語を主として使用する学校である。これらの学校は、単に同じ校舎を使用しているだけでなく、音楽・美術・体育・コンピュータ・家庭科などは合同クラスで主に英語による授業を受けている。生徒の国籍もさまざまであるが、教員グループも多国籍（一九九八年度は専任教員だけで八カ国）からなり、日本語と英語のバイリンガルのミニ国際社会を形成して、相互交流を活発に行い、二一世紀のグローバル・コミュニティに貢献し得る人材の育成を目標にしている。

英語はレベル別クラス、国語・数学には基礎クラスもあり、基本的に個人に対応した教育をしている。

(二) 進路先概要

卒業生総数二八〇名（九四く九八年度）

各々が学園生活、そしてそれに至る歴史の中で培った、多様な価値観に基づき、自身で情報を収集するとともに、学園の教員達（日本人・外国人）の助言を得ながら決定している。ほとんどが大学へ進学する中で、各年毎に、約四〇校の私立大学、約一〇校の国立大学、及びアメリカ、イギリスの大学へ進学している。

帰国生徒の受け入れを中心に、日本で生まれ育った日本人生徒、及び外国籍生徒、また二重国籍生徒が、共に学びあえる学園、「新国際学校」として一九九一年に開設された当学園も、全体として、英語圏の現地校、インターナショナルスクール、及び世界各地のインターナショナルスクールの出身者の割合が高い。日本人学校出身者の意識、また本校における英語中心の傾向等、考えなければならぬ点が多い。

制度的なもの

本学園のカリキュラム

本学園では、様々な背景を持った生徒を受け入れ教育するため、の試行錯誤をこの一〇年間行ってきた。学年途中での編入学生、また、国際学校との相互乗り入れによる年度の開始・終了の違いの問題も加わり、カリキュラムの構成は大変な作業になっていた。更に、開校当初から選択の幅の広いカリキュラムであり、第二外国語、コンピュータなどの科目も開講されていたため、時間割の編成はアクロバティックなものになっていた。

例えば、OIS生徒のなかには、両親のどちらかまたは両方が

日本語を第一言語にする者、日本語による教育を受けたことがあり日本語に堪能な者が多数在籍し、これらの生徒はOISが開講する日本語のクラスの上級レベルを修了し、SISの国語の授業を受講する。彼らは、九月に学年が変わるため、七年生になった生徒が、中学一年生の二期の授業に参加し始めることになる。ところが、翌年の四月には、席を並べて学習していた中学一年生が二年生になり、クラス編成も変わり、時間割も変更になる。ここでOIS側は時間割の調整を行い二年生の授業に参加することにするか、順番が逆になるが新一年生の一学期の授業に参加すること（つまり、二―三―一学期の順で履修する）。この二つの方法はそれぞれ数年度に渡って試行された。前者では、中学での学習のスキル・習慣を重点的に学習する中学一年生一学期を経ないまま、国語の学習を開始することになり、後者では、違う学習集団の中で、教材・授業内容などの難易度が逆転した一学期間を過ごさなければならぬ。

また例えば、高等部において国語科は、年度途中の編入学者（九月から授業に参加するOISの生徒も同様）には、放課後または生徒の空き時間に古典の補講を行うなどして対応していたが、これは授業時数は一六〇ではあるが、平均三〜四学年、四〜五教材を担当する国語科教員にとってはかなりの負担となっていた。

この状況を打開するために、また、生徒の選択の自由度を高め、一人一人の個性やニーズに対応するべく計画され、一九九九年より実施されているのが、学期完結制である。

学期完結制

高等学校において、各学期で授業が完結し、それぞれに単位・成績を与えるというものである。本校で、この「実験」が開始されたのは一九九九年度からである。S I S が四月から実施し、O I S は九月から合流した。

本校は、週休二日制を開校時から採っているが、四月から六月いっぱいには六〇日の授業日を確保し、「春学期」、九月から一月末までに六〇日間の「秋学期」、一月末から冬季休業を挟んで三月半ばまでに六〇日間の「冬学期」と呼んでいる。よって年間合計一八〇日間の授業日を確保している。よって年間合計一八〇日間の授業日を確保している。そのため、「学園祭」「体育祭」また「卒業式」などの行事は土曜日に行い代休はない。また、各教科の試験は、授業中に行うため、特別な試験期間もない。

このそれぞれ六〇日間の各学期ごとに、それぞれの科目を完結させ、成績・単位（高等部における）ともに与えてしまうというのが、学期完結制の概念である。高等学校での必修単位は、学習指導要領の必修単位に限られ、各自は、大変自由度の高い時間割を作成することが出来る。また、生徒によっては、国語・数学・英語など「主要三科目」と呼ばれるような科目を一つ、二つ、履修しない学期も、当然のことながらある。

生徒は、各学年の初め迄に、三学期分の履修を、毎年発行される「コース・デスクリプション」という各科目の担当教員・時間数・授業内容が詳細に期された冊子を参考に決定し、教務へ申し込む。それに際して、各学級担当とコース・アドバイザーと

呼ぶ担当職員が、相談・アドバイスをを行う。

高等部での科目は、基本的に毎日一時間の週五時間で構成されており、国語科でいえば、指導要領の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の授業に相当する科目は週五時間である。また、週二時間、三週三時間の科目も開設されており、国語科では、「国語Ⅱ」の四単位（二期分）の単位を修得した者が履修可能となっている「現代文」「古典Ⅰ」「国語表現」に相当する科目に二時間のものがある。各学期最低六単位分は履修することになっており、最高では放課後の第二外国語を含めると一三単位分ほどが履修可能である。

この発表に当たって、各校の単位制高等学校（茨城県立牛久栄進高等学校、東京都立新宿山吹高等学校、岡山県立倉敷古城池高等学校、福岡県立博多青松高等学校）のシラバス（インターネット上に公開されているもの）を調べたが、それぞれの授業の期間は、通年、または半年間（セメスター）のもので、本校が三学期（トライメスター）のそれぞれで単位を認定しているのはごく稀のようである。

ただ、中等部では、二年次まではほとんどが必修の科目であり、選択可能なものは「音楽」（合唱・吹奏楽・弦楽それぞれ初心者向け・経験者向けから選択）と第二外国語（現在独語、仏語、西語、中国語を開講）のみである。また国語・数学は通年で行われている。他の科目は、各学期ごとに内容・担当が変わったりするので学期完結の影響を受けているともいえる。三年次以降になると、例えば数学科では中学三年生以上の学習内容をすべて再構成し中学三年次で因数分解等、必修である「数学Ⅰ」の内容をカバー

し、高等部進学後の選択の自由度を高めたり、英語科ではさらに中学三年以降のクラスは基本的にオープンであり、習熟度のガイドラインに沿ってではあるが無学年制での授業を展開している。他教科、制度面についての詳しいことは、今秋発行される「千里国際学園 紀要第八号」に詳しく掲載されるのでそちらに譲ることにする。

内容的なもの

ここでは、千里国際学園の国語科が数年間に渡り継続して取り組んできた「多様な背景を持つ学習者に対応する試み」の実践を紹介する。

実践例

中等部一年次

・竹取物語絵巻

教科書（光村）に掲載されている『竹取物語』を学習した後、授業担当者が用意した本文（傍注付きテキスト 下図参照）に沿った絵を描き、本文も添える。中等部一年次では、一学級が一五〇二〇名の三学級編成であるため、本文は、八〇種類とし、クラスを二グループに分けそれぞれを担当者を決めた。各クラス二本計六本の巻物が完成した。通常、冬休み前の時期四〜六時間ほどを充てるが、服装・家屋などの考証も図書館などを利用して正確に期することを一つの柱とする。

図書館を利用して、それをまとめるという作業の第一歩。グループでの作業となるため、全体の出来に対する責任感も生まれ、また、それぞれの知識・興味は違っても助け合って作業することが出来るようである。また、必ず翌年度の入学時期に、校内中央に位置する図書館の入り口に展示することになっており、必ず多くの人の目に触れるという意識も動機付けに役立つようである。

（蛇足ながら、毎年「かぐや姫」のお話を聞いたことがない、ラジオ体操をしたことがないという生徒は必ずいる）

・故事成語紙芝居

上記の『竹取物語絵巻』と同様の作業。一〇年間のうち一度ほど実施。（当時の担当者の好みと思われるが、記録がはっきりと残っておらず、詳細未詳）

中等部三年次

・平安時代事典

各生徒が自分の興味のある事柄について調べA4用紙二枚から六、七枚程度の分量にまとめ、各学級一冊の事典を作り上げ、全員に配布する。その内容は、中等部第一期生の九三年度からの七年間、服装・食べ物といった一般的なものから、宗教・物の怪、はては男色といったものまで多岐に及んだ。通常、題材の決定から作成、印刷、製本（各クラス趣をこらした表紙を作成する）まで二週間以上を費やす。

これも図書館、近年ではインターネットそのほかのメディアも利用しての調査作業となる。開設の文章は、オリジナルでなければ

ばならず、また、人目にも触れ形として残るため地道で丁寧な作業が要求される。各生徒の興味によって題材が決定されるため、モチベーションが高い。最近の数年は、ワード・プロセッサを利用して作成・提出する生徒も増えており、ずいぶん立派な体裁のものになってきたように思う。

また、中等部では、「チャリー」と呼ぶ漢字テストを週一回、作品ごとの語彙・漢字調べの「言葉ノート」、各学期、夏・冬の長期休暇の「読書ノート」が必須となっている。漢字テストは、教育・常用漢字の範囲の同じテキストを三年間使用する。これは、全ての生徒に基礎的な学力を保証する手だての一つと考えている。十年一日のごとく行っているもので、「言葉ノート」とともに、どんな生徒でも時間をかければできるといふものを定着させるのも多様性への対応であると考える。「読書ノート」はあくまで、各生徒の読書の記録であり、その学期に学習した作品・単元に関連するジャンルの本を指定することもあるが、配布されるB5サイズ用の紙に、一番印象の深かった部分を記し、その理由・感想を書き、ストックしていくというものである。通常、毎回二枚の提出。ストックしていくノートは三年間使い続けることを指導している。

高等部一年次

・レポートの書き方実習

九八年度まで、OISは六月半ばに年度を終了しており、SISは一八〇日の授業日を確保するために、七月上旬まで単独で授業

を行っていた。音楽・美術・体育・英語などの多くの外国人教員が、契約上一足早く休暇にはいるため、二週間ほどの特別時間割で授業を行っていた。この時期に、他教科にも協力を願って行ったのがこの単元である。本学園では、中等部から様々な教科でレポートの提出が課されるが、それぞれの教科によって、体系的にその書き方の指導が行われていたわけではない（英語科はのぞく）。そこで、各教科から担当者ごとに専門領域から数個の題材を提示してもらい、生徒がその中から選択して、指導担当者（大袈裟に「指導教官」と呼んでいた）につき、取材・構成・下書きの三段階で必ず「指導教官」に点検を受けることにした。使用する言語は日本語である。また、論文の構成は必ず、序論・本論・結論という形をとり、目次も必ずつけることにした。分量的には、四〇〇字詰め原稿用紙で五枚以上ということにしたが、かなり細かく枠組みが決められていたため、また、必ず定期的に教員の指導を受けなければならぬため（三つの段階で担当教員のサインをもらう用紙をつくり、レポートの表紙に添付して提出することを義務づけた）、それぞれ興味、また、能力に応じて着実に取り組むことが出来たようである。惜しむらくは、いびつな授業形態の徒花としての単元だったため、二回しか実施されておらず、毎年継続できていればと、悔やまれる。今後、何かの形でこの思想を生かしてゆきたい。

高等部三年次

九八年度までは、三年次で現代文二時間が必修であったため、

四〇〇字詰め原稿用紙一〇枚以上の「卒業論文」を全員に課していた。これは自由登校に入る前、冬休み迄迄りを締め切りに、タイプし、プリントアウトと打ち出し原稿を提出することになってた。これを国語科で一つにまとめ、業者に発注して印刷・製本し、卒業式で配布していた。九五年卒業の高等部二期生から六期生まで五冊の『卒業論文集』が刊行された。本校の卒業生は、ほぼ一〇〇%が進学希望であり、「この忙しい時期に」という不満がなかったわけではないが、六年間の集大成として、何か形に残るものが出来るのは満足のいくものであったようである。コストを切りつめるために、レイアウトまで国語科で行い、プリントアウトを印刷所に持ち込んでいた。

いくつかの実践例を抄録したが、本学園での国語科に与えられた授業時数は、中等部では、一年次書写一時間を合せて四時間、二年時三時間、三年時三時間であり、高等部では先に述べたとおりである。この限られた時間内で、様々な背景を持った生徒たちが一堂に会して、学習している。

この十年間の歩みの中で、明らかに変わったのは「個性を認めあうための前提の保証」の必要性であり、各学習者が、個々に応じて達成感を得ることの出来る枠組みの提示も必要であるということである。一人でも「路頭に迷い途方に暮れることなく」、また、「道を踏み外すことなく」学習できるような緩やかな枠組みは、よく考えられ、繰り返し学習者に提示されなくてはならないと思う。

これは、上記のような実践例の中で、海外で教育を受けたため、

試験など、一般的な国語の学力の側面では力を発揮できない、日本語が苦手な生徒でも、何かを表現するとき、人の前で発表するときなどは、日本で教育を受けてきた生徒には出来ないような鮮やかな手際を見せたり、日本語は稚拙であっても深い洞察を見せたりする。こういった各自が力を発揮することの出来る機会を設け、生徒同士が、多様な尺度を持って、それぞれの場面でお互いを評価できるように指導することも大切だと思われる。

また、多様な学習者のいる教室で必要な能力は、「自分で自分を納得させる力」であるということも、他文化のゴツゴツ煮の中で学んだ大きなもののひとつである。昨今では、表現力や意見を述べる力を養成するという目的で、ディベートの授業への導入が盛んなようであるが、ディベートの授業で身につけてもらわなければならない重要な能力はそれだけではない。対立した意見を持ち、話し合いをした際に感情的・感覚的には受け入れがたいものであっても、論理的に相手が正しい場合は、自分で自分を納得させることが出来なければならぬのである。話し合いの際に、存在するのは「適切であるかないか」「妥当であるかないか」であり、「勝ったか負けたか」ではないという意識を身につけなければならないというわけである。異なる背景を持った者が、同じ教室で学ぶ場合、同じ社会で暮らす場合、このルールが各自に徹底していなければ共存は危ういものになるということを各自が身にしみて理解するように教師は配慮しなければならぬし、自身も気をつけなければならない。

テクノロジーの応用

蛇足ながら、テクノロジーの国語科の教育への援用の可能性について多少々考察してみる。

本学園では、授業で使用されている時間以外は、コンピュータ・ラボを生徒が自由に使用できることにしている。朝は、八時から夕方は下校時刻の六時までである。中学一年時に各クラス一学期間、全員がネットワーク概念、ログオンの仕方、メールの受け方出し方、WWWの閲覧の仕方、また、ワープロ、表計算、プレゼンテーションのアプリケーションの基礎を学ぶことになっている。生まれる前からファミコンが存在していた世代である彼らは、いとも簡単にそれらを飲み込んでゆく。彼らの多くが熱中するものが、チャットでありBBSとよばれる掲示板である。はたまた、携帯電話を黙って操作しているかと思えば、そこから電子メールを発信していたりもする。テレビの、若者向けバラエティー番組でも字幕が多用されており、それを彼らは楽しんでる。彼らは、実は、活字自体にはアレルギーはないのではなからうか。

ただ、そこで使用される言語は、作家の高村薫はこれを「内輪の記号紡ぐ社会」と表現したが、特定の「仲間内」でしか通用しない話し言葉そのものであり、眩きであり、また、「(こ)」といったような記号であったりする。

コンピュータそれ自体、また、ネットワークそれ自体は道具であり器であるので、重要なのはその内容であり、不特定多数への他者意識であろう。この点に注意を払わなければ、また、生徒に

理解させなければ、国語科の教育にはなるまい。

本学園の英語科では、レポート作成に際して、タイプされたものを提出させるのが定例であるが、最近では、マルチ・メディアのプレゼンテーション用アプリケーションである。Power Pointを使った作品を提出させている担当者も複数いるようである。また、生徒は必ずと言っていいほど、授業で全員を前に（たいていの場合、参観はオープンであり、朝の職員朝礼、または電子メールで発表会の告知が行われる）発表を行う機会が与えられる。このような発表の手段、機会の提供は有効かと思われる。また、簡単にウェブ・ページを作成できるアプリケーションが無料でも入手できるので、校内のネットワークで全校生徒に公開したり、全世界（！）に公開することも出来る。これは、コミュニケーションしようという意欲を喚起するのに効果があるように思われる。

作文などの提出物をタイプして提出させれば、文集の編集も楽であり、簡単に印刷出版することが出来る。

調べものに関しても、インターネットは大変便利なものである。必要なのは、収集してきた資料を単に剽窃するのではなく、必要に応じて構成し、自分の言葉でまとめる能力の養成であろう。

多くの辞書がCD-ROMされて出版されている。また、「新潮文庫の一〇〇冊」など文学作品もCD-ROM化されており、購入できる。更に極めつけは、「青空文庫」というウェブ上に公開された図書館であろう。これは死後五〇年を経て著作権の切れた作家達の作品が無料で閲覧できるといふものである。
(<http://www.azoragrip/>) などとも「活字離れ」と呼ばれ

る世代にとって違和感なく活字に接することの出来る場所であろう。

(千里国際学園中等部・高等部国語科)

(二九九九年 大阪国際文化中学校・高等学校から改称)